

## クシェーメンドラ本スンドラー・ナンダ物語について\*

山崎一穂

### 1. はじめに

11世紀カシミールの詩人クシェーメンドラ (ca. 990-1066) は、中世インドを代表する大著作家の一人であり、説話文学、教訓詩、修辞学など多岐に渉る分野で数多くの著作を残している<sup>1</sup>。彼は仏教徒ではなかったが、当時のカシミール仏教徒の間に伝承されていた説話をカーヴィア体の詩文に改稿し、全108章から成る仏教説話集 *Bodhisattvāvadānakalpalatā* (『諸菩薩の偉業の如意の蔓草』、以下 Av-klp) を著した<sup>2</sup>。この作品については、これまで先行するアヴァダーナ文献や律文献所収の説話との比較資料として、多くの研究者によって研究がなされ、作品中のいくつかの説話は、根本説一切有部所伝の説話集 *Divyāvadāna* や *Avadānaśataka*, *Jātakamālā* に伝承されている説話と近い関係にあることが指摘されている<sup>3</sup>。

これに対し、Av-klp の伝承する説話に、根本説一切有部の伝承には見られない、もしくは根本説一切有部の伝承とは真っ向から相反する伝承が見られるという点については、未だ十分な報告はなされていない。本論は Av-klp 第11章 *Sundarīnandāvadāna* 所収の説話、スンドラー・ナンダ物語を取り上げ、『根本説一切有部律』 (*Mūlasarvāstivādinaya*、以下 MSV) 及び漢訳『仏本行集経』を始めとする漢訳經典所伝の類話と比較検討することによって、以下の二点を明らかにするものである。

\*本論文を著すに当たり、京都大学の横地優子先生より Av-klp の解釈に関して有益な御教示を賜りました。引用した原典の異読箇所は Yokochi とあるのは先生から御指摘頂いた読みを示すものです。また、九州大学の岡野潔先生からは、Av-klp のドラマ五世版のコピーを、鹿児島国際大学の外蘭幸一先生からは、漢訳經典中のスンドラー・ナンダ物語の諸伝本に関する御教示を賜りました。茲に記して御礼申し上げます。

<sup>1</sup>クシェーメンドラの生涯、著作については、Sūryakānta [1954]; Dattaray [1974] を参照。

<sup>2</sup>Major [1992: 1-4] 参照。正確には、クシェーメンドラの真作部分は第1-107章までであり、第108章及び作品末のコロフォンは、108というラッキーナンバーを満たすべく彼の息子ソーメンドラ (Somendra) が付したものである。彼のコロフォンによれば、クシェーメンドラは Sajjanānanda と Nakka という二人の仏教徒の友人から Gopadatta の *Jātakamālā* に代わる作品を著すことを懇願され、仏教徒の学匠 Vīryabhadra の下で仏教を学び、1052年に107の章 (pallava) を書き上げたという。しかし、107章の完成からクシェーメンドラが遺作 *Daśāvātāracarita* (『十権化の行状』) を著す1066年までには14年の開きがあり、de Jong [1977: 36] は、クシェーメンドラが何故この間に第108章を著さなかったのかという点を疑問視する。

<sup>3</sup>Kirde [2007: 52] 参照。また、近年 Av-klp XXXVII *Pūrṇāvadāna* の英訳を発表した Tatelman [2000] は、Av-klp の説話の大部分が『根本説一切有部律』から採られたものであるという、以下のような見解を述べる。

Tatelman [2000: 10] Much later, the eleventh-century Kashmirian poet Kṣemendra, in his *Bodhisattvāvadānakalpalatā*, drew on the huge store of narrative material in the *Mūlasarvāstivāda Vinaya* to compose, in a style more epic and less ornate than the classical *Jātakamālās*, one hundred and eight verse *Jātakas* and *Avadānas*.

(1) Av-klp の所伝と MSV の所伝は互いに共通する要素を多く保持しており、大筋では同系統に属すると見ることができ、他方では、前者は後者に見られない、或いは後者と相反する伝承を保持している。

(2) それら MSV に見られない、或いは相反する Av-klp の伝承が、同じく MSV の所伝と同系統に分類される漢訳経典『仏本行集経』の所伝に等しく見られ、Av-klp の祖形伝本は『仏本行集経』の祖形伝本と最も近い関係にある。

## 2. スンダリー・ナンダ物語の類型化

### 2. 1. 考察の対象とする伝本

スンダリー・ナンダ物語は、仏陀の異母弟、難陀の出家を主題とする作品である。仏弟子としての難陀に関する記述は、初期仏教経典の *Theragāthā* 2.157-158 及び *Dhammapada* 13-14 に見られ、彼が愛欲に悩まされていた時、仏陀によって迷いの生存世界から救済されたことが述べられている。スンダリー・ナンダ物語は恐らく、この仏弟子難陀の離欲譚に後代様々な要素が付加される形で、北伝、南伝の仏教教団の間に成立し、各々の諸伝本に継承されていったものと思われる。うち、本論で Av-klp 本との比較考察を行うのは、以下の伝本である。

- *Saundarananda* (Saund) Aśvaghōṣa 作 2世紀頃。
- *Jātaka* #182 *Samgāmāvacarajātaka* (Ja) 成立年代不詳。
- *Dhammapadaṭṭhakathā Nandatheravattu* (Dhp-a) 450年頃。
- *'dul ba phran tshegs kyi gzhi*<sup>4</sup> (MSV) Vidyākaraṇaprabha、Dharmaśrībhadrā、dPal 'byor 訳 8-9世紀頃。
- 『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷第十一、第十二<sup>5</sup> 唐・義浄訳 710年。
- 『仏本行集経』第五十七卷 難陀出家因縁品<sup>6</sup> 隋・闍那崛多訳 6世紀頃。
- 『雜宝蔵経』第九十六卷 仏弟難陀為仏所逼出家得道縁<sup>7</sup> 元魏・吉迦夜、曇曜訳 472年。
- 『増一阿含経』第九卷 慚愧品第十八<sup>8</sup> 東晋・瞿曇、僧伽提婆訳 4世紀。

難陀に関する記述を含んだ伝本は、この他にも存在するが<sup>9</sup>、本論では、2.2 に述べるエピソードを含む伝本のみを対象とし、それらを欠くものについては、物語としての性格を欠くと判断し、考察の対象から外した。

<sup>4</sup>D#6, Tha119a3-158a6; P#1035, De114a3-150b3.

<sup>5</sup>T#1451, 251a8-262a20.

<sup>6</sup>T#190, 911b24-918a22. この経典は複数の仏伝の集成であり、その資料としては、第六十卷末で『大事』(*Mahāvastu*)、『大莊嚴経』、『仏生因縁』、『釈迦牟尼仏本行』、『毘尼蔵根本』という五つの伝本の名が挙げられている。但し、現存するもので明確に資料と断定できるものは『大事』のみである。Panglung [1981: 176] は *Mahāvastu* 中にスンダリー・ナンダ物語の類話が見られることを述べるが、筆者の見限り、相当する箇所を見出すことはできない。

<sup>7</sup>T#203, 485c11-486c25.

<sup>8</sup>T#125, 591a8-592c9.

<sup>9</sup>例えば、『仏説衆許摩訶帝経』第九 (T#191, 957c1-958a5); 『雜阿含経』第十一、三十八 (T#99, 73a22-73c8, 277a10-277b5); 『別訳雜阿含経』第一 (T#100, 274a19-274b20) などが挙げられる。ジャイナ伝本については、渡辺 [1990: 43-44] を参照されたい。

## 2. 2. スンドリー・ナンダ物語の構成

まず、Śāstri [1910]; 平等 [1938]; Panglung [1981] の先行研究を基に、スンドリー・ナンダ物語の構成について見てみよう。上記伝本の物語を構成するエピソードは、次の通りである。

- (1) 難陀の苦悶 世尊のもとで出家した難陀が、妻のことを想起して苦悶する<sup>10</sup>。
- (2) 雌猿と天女を見せる仏陀 世尊は難陀に醜い雌猿と天女を見せ、天女の美に魅了されて妻の美しさを忘れてしまった彼に、梵行を修するならば、天女を授けると約束する。
- (3) 阿羅漢果の獲得 難陀は初め天女を目当てに梵行を修することを決意するが、最後には色欲を断じて、阿羅漢果を得る。

## 2. 3. 伝本間における諸要素の分布

伝本は全て上記(1)–(3)をこの順序で述べるが、各々の内容を更に詳細に分析すると、細かな差異を確認することができる。それを明確にすべく、伝本間の諸要素の有無を図示したものが、下図である。尚、表中に△印を付したものは、完全には一致しないが、類似した要素が存在することを示す。

	Saund	Ja	Dhp-a	MSV	有部律	Av-klp	仏	雑	増
(a) カピラヴァストウの叙述	○	×	×	×	×	×	×	×	×
(b) 女性の名を孫陀利とする	○	×	×	○	○	○	○	○	○
(c) 妻を描く難陀	×	×	×	○	○	○	○	×	×
(d) 神変で難陀を阻む仏陀	×	×	×	○	○	○	○	○	×
(e) 阿難に非難される難陀	○	△	△	○	○	×	○	×	×
(f) 地獄を訪れる難陀	×	×	×	○	○	○	○	○	○
(g) 入母胎経を説く仏陀	×	×	×	○	○	×	×	×	×
(h) 四つの過去世物語	×	△	△	○	○	○	○	△	×

以上に図示した諸要素の対応関係から、スンドリー・ナンダ物語の諸伝本について、次の事実が指摘されよう。

- MSV と漢訳『根本説一切有部律雜事』の所伝は、(a)–(h)の要素を全て共通して伝承しており、ほぼ同じ祖形に基づいていることが知られる。
- Av-klp の所伝は、内容的に見てMSVと『仏本行集経』の所伝に最も近く、両者と共通の祖形から生じた可能性が高い。Av-klpを含むこれら三伝本は、MSV系統というグループに区分けできる。
- Saundは要素(b)(e)を含む点では、MSVの所伝と共通するが(Saund 4.3, 11.8–62)、残る要素(c)(d)(f)–(g)は見られない。この事実からは、馬鳴がSaundを著すにあたって、MSVの

<sup>10</sup>パーリ伝本では難陀が妻帯していたという記述はなく、難陀は出家時に彼を引き止めた「地方の美しい娘」(Janapadakalyāṇī)に愛着したと述べられる。

所伝に依っていた可能性が低いことが知られる<sup>11</sup>。また、この伝本はカピラヴァストウの神話を叙述する要素(a)を含んでいる点で、他の伝本との相違が見られる(Saund 1.1-62)。要素(a)を含む伝本は他になく、(a)は恐らく馬鳴による付加と考えられる。

- Ja, Dhp-a の所伝は難陀が非難される記述、過去世物語を含むが(Ja 93.25-94.4, 94.14-95.19; Dhp-a 101.10-19, 103.27-105.21)、他の伝本が難陀を非難する人物を阿難とするのに対し、両者では、難陀を非難する人物はそれぞれ舍利弗、比丘である。また、過去世物語については、Ja は難陀を象、仏陀を象使いとする一つの物語、Dhp-a は難陀を驢馬、仏陀を商人とする一つの物語で完結している。更に、両者は要素(b)-(d)、(f)(g)を欠いている点から判断して、MSV 系統の伝本とは最も隔たりがある。
- 『雑宝蔵経』の所伝は要素(d)を含む点で、MSV 系統の伝本と類似を見せるが(T485c26-29)、要素(c)(e)(g)を欠き、過去世物語が難陀をカーシーの王、仏陀を猿王とする動物寓話一話で完結している点で(T468b15-c25)、『増一阿含経』の所伝は、要素(b)-(e)、(g)-(h)を欠く点で、MSV の所伝とかなり開きがある。しかし、地獄の記述を含んでいる点では、いずれも MSV の所伝と共通する(T486b1-8; T592a20-27)。MSV を著した根本説一切有部は夙に知られているように、北インドのマトゥラーを中心に発展した部派であり、かつ『雑宝蔵経』、『増一阿含経』の成立はいずれも二～三世紀の西北インドと推定されているから<sup>12</sup>、ほぼ同時代に成立した Saund に地獄の記述が見られない点を併せて考えるならば<sup>13</sup>、この記述は、遅くとも紀元前後までに西北インドで付加されたものと推定される。

### 3. MSV、Av-klp、『仏本行集経』に共通する記述

以上の考察から、Av-klp の所伝は、MSV<sup>14</sup>、『仏本行集経』の所伝と共通する多くの要素を含んでおり、これら二伝本と近い関係にあることが知られた。そこで、以下に三伝本に共通する要素を順に見ていくことにしよう。

#### 3. 1. 妻を描く難陀

まず初めに、世尊の言葉に従って出家した難陀が、妻孫陀利を想起する場面を見よう。MSV 系統の三伝本には、難陀が妻との別離に苦しむ余り、彼女の姿を描いたことを述べる次のような一節が見られる。

<sup>11</sup>Saund の資料の問題は、馬鳴の所属部派に関する問題と相俟って、それを特定することは非常に困難である。彼の所属部派については、Sylvain Lévi の説一切有部説以降、瑜伽行派説(松濤誠廉氏)、多聞部或いは鷄胤部説(E. H. Johnston)、経量部説(金倉円照氏、本庄良文氏)などが立てられている。Johnston [1936: xl] は、Saund に説かれる教義の骨子は、*Āṅguttara-Nikāya* IV 166-168 に倣って著されたものであろうという見解を述べる。

<sup>12</sup>干潟 [1954: 119] は、『雑宝蔵経』の説話中に、(1) ガンダーラ地方にその彫像がよく見られる曠野鬼神(Ātavaka)の前世物語を含んでいること、(2) ミリンダ王とナーガセーナ長老に関する記述があること、(3) カニシカ王が馬鳴、大臣マータラ、医師チャラカを友人としていたという記述があることの三点を根拠に、その成立をカニシカ王時代よりやや後の西北インドと見る。

<sup>13</sup>Johnston [1936: xvii-xviii] は、馬鳴の諸作品に見られる『ラーマーヤナ』の影響や、Saund や *Buddhacarita* の冒頭部で、釈迦族のイクシュヴァーク王朝起源を強調している点などから、彼が明らかに出身地の Sāketa (アヨーディヤー) と歴史的に関わっていたという見解を述べる。この点を考慮すると、馬鳴は中インド～東インドの伝承に依って Saund を著した可能性がある。

<sup>14</sup>2.3 に述べたように、漢訳『根本説一切有部律雜事』の所伝は MSV とほぼ同系の伝本と考えられるから、以下では MSV に同じものとして扱う。

[Av-klp XI 54]

iti saṃcintya sa śanair ālilekha śīlātale |

sundarīm katham apy aśrusnātakampākulāṅguliḥ<sup>1</sup> ||

このように考えて、涙に洗われ、震えを抑えることができない指をした彼は<sup>15</sup>、石の表面に、ゆっくりと、辛うじて孫陀利を描いた。

[MSV D121b6-7; P116b6-7]

de nas dus gzhan zhig na tshe dang ldan pa dga' bo phyogs gzhan zhig na rdo leb la 'dug pa dang | des shin tu bzang mo dran nas des de rdo leb de la ri lus bri bar brtsams pa dang<sup>1)</sup>

そして或る時、難陀長老は、或る場所で石の座の上に座した。〔そして〕彼は孫陀羅のことを強く想起し、それによって彼女をその石の座の上に赤堊（ri lu）で描き始めると、

[仏本行集経 T913a7-11]

還憶彼女釈孫陀利。念其色欲。不行梵行。欲捨其戒。還本家宅。以是因縁恒画彼女孫陀利像。後於一時。至阿蘭若空閑之处。或取甃瓦。或取木板。画此釈女孫陀利像<sup>(1)</sup>。

### 3. 2. 庵を塵で満たし、難陀を阻む仏陀

次に、妻との別離に耐えられず逃走を試みた難陀が、仏陀の起こした塵の神変によって阻まれる場面を見てみよう。ここでも、MSV 系伝本には全く同じ記述を見ることができる。

<sup>1</sup>katham apy aśru- ] Ex conj. de Jong; mukhamuktāśru- Ed; katham asy aśru- DZ.

<sup>1)</sup>[根本説一切有部律雜事 T252a15-16] 後於一時難陀在石上坐憶孫陀羅。即於石上画作其像。（西本 [1935: 166] 「後に一時に於て難陀は石上に在りて坐して孫陀羅を憶し、即ち石上に於て画いて其像を作れり。」）

<sup>(1)</sup>常盤・美濃 [1934: 444] 「還りて彼の女釋孫陀利を憶ひ、其の色欲を念じて梵行を行ぜず、其の戒を捨てて、本の家宅に還らんと欲す。是の因縁を以て、恒に彼の女孫陀利の像を画く。後に一時、阿蘭若空閑の処に至り、或は甃瓦を取り、或は木板を取りて、此の釈女孫陀利の像を画き、」

<sup>15</sup>d 句については、解釈が二通りに分かれる。“aśrusnāta-” 「涙に暮れた」と “kampākulāṅguli-” 「指の震えを抑えることのできない」の二つの形容詞が共に a 句の “sa” 「彼（難陀）」を形容しているとするならば、「涙に暮れ、指の震えを抑えることのできない〔彼（難陀）〕」という viśeṣanobhayapadakarmadhāraya として解釈可能である。また、“aśrusnāta-” 「涙に洗われた」と “kampākula-” 「震えを抑えることのできない」という二つの形容詞が共に “aṅguli-” 「指」を形容しているとするならば、「涙に洗われ、震えを抑えることができない指をした〔彼（難陀）〕」という bahuvrīhi として解釈できる。相当する Tib. は mchi mas bkruś shing 'dar ba yis 'khrugs pa'i sor mos 「涙で沐浴し、震えて乱れた指を使って」と解釈する。“aśrusnāta-” という表現は、Vidyākara (11 世紀) の著した詞華集 *Subhāṣitaratnaśoṣa* における Bāṇa の詩に用例が見られ、“stanayuga-” 「乳房」の形容句として用いられている。

stanayugam aśrusnātaṃ samīpataravartihṛdayaśokāgneḥ |

carati vimuktāhāraṃ vratam iva bhavato ripustrīṅām || 41.54 (1434) ||

Ingalls [1965: 381] **The breasts** of your enemy's wives seem to practice penance. Forgoing their feasts of necklaces and **having bathed in tears**, they sit right next the fire of their heart's grief. (強調は筆者による)

[Av-klp XI 84–85]

tataḥ kadācid ādiśya nandam āśramamārjane |  
āpannānugrahavyagrah<sup>2</sup> prayayau bhagavān punaḥ ||  
tacchāsanāt pravṛttasya nandasyāśramaśodhane |  
no bhūtalād apayayau rajo rāga ivāśayāt ||

そして或る時、難陀に庵を掃き清めるよう指示し、世尊は苦しむ者に恩恵を施すことで心がいっぱいであったので、再び去って行った。彼の命令に従って、難陀は庵を掃き清めることに従事していたが、〔彼の〕心から色欲が〔決して消え失せることがなかった〕ように、地表から埃は決して消え失せることがなかった。

[MSV D120b2: P115b2–4]

dga' bos bsams pa | gtsug lag khang phyags la 'gro'o snyams nas des phyag dar byas pa dang | bcom ldan 'das kyis gang gi tshe khyams cig phyags pa de'i tshe gnyis pa phyag dar gyis gang bar gyur pa de ltar byin gyis brlabs so | des bsams pa | phyag dar bor la 'gro'o snyam nas des phyags ma bzhag ste phyag dar dbo bar brtsams pa dang | zad par ma gyur nas des bsams pa |<sup>2)</sup>

難陀は「寺院を掃除しに行こう。」と考えて、彼は掃き清めると、世尊は一つの中庭が掃き清められたその時、二番目〔の庭〕を塵でいっぱいにするという、そのような神変を起こした。彼は「塵を捨てに行こう。」と思い、彼は箒を置いて塵を捨て始めると、〔塵は〕尽きることがなかった。〔そこで〕彼は考えた。

[仏本行集経 T913c24–29]

今者世尊。已赴他請。往於聚落。我今可得自往向家。作是念已。顧見如来所住之房。多有糞土。見已作念。我今先往掃彼糞穢。然後向家。作是念已。執持掃帚。往掃彼房。其掃一辺。風来還吹。土草滿地。更須報掃<sup>(2)</sup>。

### 3. 3. 独覚を供養し、仏塔を建立する長者

最後に、物語の末尾で説かれる難陀の過去世物語について見てみよう。先に図示したように、過去世物語は Saund、『増一阿含経』の所伝を除く全ての伝本に存するが、パーリ及び『雑宝蔵経』

<sup>2</sup>āpannānugraha- ] Ex conj. de Jong; āsanānugraha- EdDZ.

<sup>2)</sup>[根本説一切有部律雜事 T251c6–9] 我掃地了即可還家。遂便掃地。世尊觀知以神通力令掃淨處糞穢還滿。復作是念。我除糞穢方可言掃。放箒取持糞穢無盡。(西本 [1935: 165] 「我れ地を掃き了らんに即ち可しく家に還るべし」。遂に便ち地を掃けるに、世尊は觀知して神通力を以て掃淨処をして糞穢還滿たさしめたまへり。復是念を作さく、「我れ糞穢を除かんに方に可しく掃を言ふべし」。箒を放ちて取持せるも糞穢尽くるなかりき。)」

<sup>(2)</sup>常盤・美濃 [1934: 447] 「『今、世尊は已に他の請に赴きて聚落に往きたまふ。我、今自ら往きて家に向ふを得べし』と。是の念を作し已り、如来所住の房を顧見するに、多く糞土有り、見已りて念を作すらく、『我、今先づ往きて彼の糞穢を掃ひ、然る後家に向はん』と。是の念を作し已るや、掃箒を執持して、往きて彼の房を掃き、其の一辺を掃くに、風来りて還た吹き、土草地に満ちて更に報掃を須つ。』

所伝の過去世物語が動物寓話的な一話の過去世物語で完結しているのに対し、MSV系伝本には、順序と内容に差異こそ見られるものの、等しく四つの物語が存している。うち、以下に示す独覚を供養する長者とクリキン王の息子の物語は、MSV、Av-klp、『仏本行集経』の中に、ほぼ同じものを見出すことができる。

[Av-klp XI 145cd–146]

tatpuṇyapraṇidhānena jāto gṛhapateḥ kule ||

sa puṇyaśīlaḥ pratyekabuddhopasthāyakaḥ purā |

stūpaṃ cakre śobhamānaṃ mālābhyābharaṇojjvalam<sup>3</sup> ||

その福德によって〔長者の家柄に生まれたいと〕誓願〔を立てたこと〕によって、〔彼（マイトラ）は〕、長者の家柄に生まれた。彼は善い行いを常になす者であり、昔、独覚の世話人として、花環の飾りによって光り輝く美しい仏塔を建立した。

[MSV D156a5–156b7; P148b5–149a6]

dge slong dag sngon byung ba ri brags shig na **khyim bdag** phyug pa | nor mang pa | longs spyod che ba zhiḡ gnas te | de la skyed<sup>3)</sup> mos tshal me tog dang | 'bras bu dang | rtsa ba sna tshogs dang | chu phun sum tshogs pa | shing nmam pa sna tshogs kyis brgyan pa rab tu byung ba'i skye bo dang mthun pa<sup>4)</sup> zhiḡ yod do | ... de nas rang sangs rgyas shig ljonḡs rgyu<sup>5)</sup> zhiḡ ri brags der phyin te | de gnas tshol zhiḡ phan tshun rgyu ba na | skyed mos tshal der phyin pa dang | ... [D156b2; P149a1] des thos nas rab tu dga' ba skyes te | rings pa rings par song<sup>6)</sup> ste rkang pa la gtugs nas smras pa | '**phags pa khyod ni bsod snyoms don du gnyer pa | bdag ni bsod nams<sup>7)</sup> don du gnyer ba lags na skyed mos tshal 'di nyid du bzhugs su gsol | bdag gis khyod kyi bsod snyoms sbyar bar bgyi'o<sup>8)</sup> | des khas blangs nas de der bsam gtan dang | nmam par thar pa dang | ting nge 'dzin dang | snyoms par 'jug pa'i bde ba nyams su myong bar byed cing | dus cung zad cig 'dug nas des bsams pa | bdag gis lus rul pa 'dis thob par bya ba gang yin pa de ni thob zin gyi ma la<sup>9)</sup> bdag zhi ba mya ngan las 'das pa'i dbyings su 'jug go snyam du rig nas 'bar ba dang | gsal ba dang | char 'bab pa dang | glog 'gyu ba'i cho 'phrul dag byas te | phung po'i lhag ma ma lus pa'i mya ngan las 'das pa'i dbyings su yongs su mya ngan las 'das so ... [D156b6; P149a5] **de nas khyim bdag des dri thams cad kyī bsreg shing dag bcer nas bsregs te<sup>10)</sup> | bsreg shing de dag 'o mas bsad do | rus pa de rnams bum pa sar par bcug ste | rus pa'i mchod rten byas****

<sup>3)</sup>-abhyābharaṇojjvalam ] conj.; -abhivaraṇojjvalam Ed; -abhibharaṇojālam DZ.

<sup>3)</sup>skyed ] D; bskyed P.

<sup>4)</sup>mthun pa ] D; 'thun pa P.

<sup>5)</sup>rgyu ] D; rgyu ba rgyu P.

<sup>6)</sup>song ] D; om. P.

<sup>7)</sup>nams ] D; rnams P.

<sup>8)</sup>bgyi'o ] D; gyi'o P.

<sup>9)</sup>ma la ] conj.; mal DP.

<sup>10)</sup>bsregs ] D; bsreg P.

nas gdugs dang | rgyal mtshan dang | ba dan dag btsugs so | btsugs nas dad pa skyes te  
l de nas gur gum gyis bskus nas dri'i lag ris sum bcu byas so |<sup>11)</sup>

比丘達よ、昔或る岩山に富裕で、財力のある、生活の豊かな一人の長者がおり、そこには花と果実と様々な草とよい水と様々な種類の木に飾られ、出家者に相応しい或る園林があった<sup>16</sup>。・・・(中略)・・・その時、一人の独覚が地方を遊行していると、その岩山に着いた。〔それから〕彼は場所を探してあちこち歩き回って、その園林に着いた。・・・(中略)・・・彼(長者)は聞いて非常に喜んで、急いで行って足に触れて言った。「聖者よ、爾が施しを得ようとする者〔であり〕、私が福德を得ようとする者であるからには、この園林にとどまって下さい。私は爾の施しを用意しよう。」と。彼は受け入れて、そこで禅定と解脱と三昧と入観の樂を享受して、暫くの間座して考えた。「私はこの腐る身体で得られるべきものは得終えたが、嗚呼、私は寂靜なる涅槃界に入ろう。」と考へて、〔火光定に入って〕火焰と光と雨と稲妻の神變をなして<sup>17</sup>、無余依涅槃界において完全な涅槃を証した。・・・(中略)・・・そしてその長者は全ての香りのある薪を積み上げて焼いて、その薪を乳で消した。〔彼は〕その遺骨を新しい甕の中に入れて遺骨の仏塔を建立し、天蓋と幢と幡を置いた<sup>18</sup>。〔彼は〕置いてから、信心を生じて、それから蕃紅花を塗って、香りのする三十の掌の模様をなした。

#### [仏本行集經 T917a25-b6]

於後一生。生一大富長者之家。父母養育。隨時長大。意智漸漸。皆得成就 爾時童子其家恒有一關支仏。為作門師。數數至家。彼關支仏。可憙端正。具足三十六大丈夫相。而彼童子恒以四事。供養供給彼關支仏。盡其一形。無所乏少。其關支仏盡其住世。然後涅槃爾時長者見關支仏命終涅槃。即取彼身。如法闍毘。收取舍利。起塔供養。以泥

<sup>11)</sup>[根本説一切有部律雜事 T261b20-c12] 乃往過去於聚落中。有一長者大富多財資生無乏。有一苑園花菓茂盛。流泉浴池林木森竦。堪出家人棲隱之處。・・・(中略)・・・于時有一獨覺尊者。遊行人間至斯聚落。周旋觀察屆彼園中。・・・(中略)・・・長者聞已疾往園中。礼双足已作如是言。聖者仁為求食我為福因。幸住此園我常施食。彼見慇懃即便為受。住此園內入勝妙定解脱之業。復作是念我此臭身輪迴生死。所應作者並已獲得。宜入円寂永証無生。作是念已即昇虚空。入火光定現諸神變。放大光明上燭紅輝下流清水。捨此身已神識不生。永証無余妙涅槃界。時彼長者取其屍骸。焚以香木復持乳汁而滅其火。取余身骨置新瓶中。造窰堵波懸諸旛蓋。深生敬信灑三十種衆妙香水。(西本 [1935: 196-197]) 「乃往過去に聚落中に於て一長者あり、大富多財にして資生に乏くなく、一苑園ありて花菓茂盛し流泉浴池(多く)林木森竦して出家人棲隱の処に堪へたり。・・・(中略)・・・時に一獨覺尊者あり人間に遊行して斯聚落に至り、周旋し觀察して彼園中に届りしに・・・(中略)・・・長者は聞き已るに疾く園中に往き、双足を礼し已りて是の如き言を作さく、「聖者、仁為に食を求めんに我れ福因を為さん、幸に此園に住まりたまはんことを、我れ常に施食しまつれば」。彼れ慇懃なるを見て即ち便ち為に受け此園内住まりて勝妙の定・解脱の業に入りぬ。復是念を作さく、「我れ此臭身もて生死に輪迴せるも作すべき所の者は並に已に獲得せり、宜しく円寂に入りて永く無生を証すべし」。是念を作し已るに即ち虚空に昇りて火光定に入り、諸の神變を現じて大光明を放ち、上に紅輝を燭らして下に清水を流し、此身を捨て已るに神識生ぜず、永く無余依妙涅槃界を証せり。時に彼長者は其屍骸を取りて焚くに香木を以てし、復乳汁を持して而し其火を滅し、余の身骨を取りて新瓶中に置れ、窰堵波を造りて諸の旛蓋を懸け、深く敬信を生じて三十種の衆の妙香水を灑ぎ、」

<sup>16</sup>「富裕で～長者がおり」に想定される Skt. は *gr̥hapatīḥ prativasati ādhyo mahādhano mahābhogo...* である。この定型句の用例については、平岡 [2002: 154-155] 参照。

<sup>17</sup>この種の神變に関する記述は、MSV 中に定型表現としてしばしば現れ、Divy 144.17-18 においても、*jvalanatapanavarṣaṇavidyotanaprātihāryāni kṛtvā* という形で、ほぼ同じものを見ることができる。

<sup>18</sup>該当箇所に対応する Skt. の定型表現は Divy 583.24-26 においても、*sarvagandhakāṣṭhais citām citvā dhṁpitaḥ | sā citā kṣīreṇa nirvāpitā | tāny asthīni nave kumbhe prakṣīpya sārīrastūpaḥ pratiṣṭhāpitaḥ | chatradhvajapatākāś cāropitaḥ* という形で等しく見ることができる。

塗飾復以石灰。重塗其上。以莊嚴故。懸諸種種宝珠瓔珞<sup>(3)</sup>。

### 3. 4. 仏塔に天蓋を置くクリキン王の息子

先に述べたように、MSV 系三伝本には、難陀が前世でクリキン王の息子であった時、迦葉仏の仏塔に天蓋を置いて誓願を立てたという、次のような内容の過去世物語を等しく見ることができる。

[Av-klp XI 147–149]

tatpūnyapraṇidhānena kṛkeḥ kāśīpateḥ sutaḥ |  
so 'bhavad dyutimān nāma divyalakṣaṇalakṣitaḥ ||  
kāśyapasyārhaṭaḥ samyaksambuddhasyāntanirvṛtau |  
saptaratnamaye stūpe kṛte kāśimahībhujaḥ ||  
tatsūnur dyutimān haimacchatram āropya bhāsvaram |  
jātas tatpraṇidhānena nandaḥ śākyakule 'dhunā ||

その福德によって〔王の息子に生まれたいと〕誓願〔を立てたこと〕で、彼はカーシーのクリキン (Kṛkin) 王のドウユティマツト (Dyutimat) という名の、神々しい相によって特徴付けられた息子となった。阿羅漢、正等覚者、迦葉仏がついに入滅して、七宝から成る仏塔がカーシーの王によって建立された時、彼の息子ドウユティマツトは、光り輝く黄金の宝蓋を〔仏塔の上に〕置いて、その誓願によって、今、難陀として釈迦族に生まれた。

[MSV D157a6–157b4; P149b1–150a1]

dge slong dag sngon byung ba bskal pa bzang po 'di nyid la skye dgu'i tshe lo nyi khri  
thub pa na ston pa ... bcom ldan 'das [D157b1] 'od srung zhes bya ba 'jig rten du byung  
ste | de grong khyer bā rā ṇa sī na rten cing drang srong smra ba ri dags kyi nags na bzhugs  
so | de'i tshe de'i dus na bā rā ṇa sī na rgyal po kri kī zhes bya ba rgyal srid byed du  
'jug ste | ... rgyal po de la bu gsum ste | rab dang | 'bring po dang | tha chungs so | gang gi  
tshe yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'od srung sangs rgyas kyi mdzad pa mtha'  
dag mdzad nas bud shing zad pa'i me bzhin du phung po'i lhag ma med pa'i mya ngas  
las 'das pa'i dbyings su yongs su mya ngan las 'das pa de'i tshe rgyal po kri kīs de'i  
sku la mchod pa byas nas rin po che bzhi las byas pa mchod rten khor yug tu dpag  
tshad gcig pa | [P150a1] 'phang du dpag tshad phyed pa zhig brtsigs so | de la gdugs

<sup>(3)</sup>常盤・美濃 [1934: 457–458] 「後の一生に於て一大富長者の家に生れ、父母の養育にて、随時に長大し、意智漸漸に皆成就するを得たり。爾の時童子、其の家に恒に一辟支仏有り、為めに門師と作りて、数数家に至る。彼の辟支仏は、喜ぶべく端正に、三十大丈夫の相を具足せり。而して彼の童子、恒に四事を以て、彼の闢支仏を供養し供給し、其の一形を尽して、乏少する所無し。其の辟支仏、其の住世を尽して、然る後涅槃したまふ。爾の時長者、辟支仏の命終涅槃せるを見、即ち彼の身を取りて、如法に闍毘し、舍利を收取して、塔を起てて供養し、泥塗を以て飾り、復石灰を以て、重ねて其の上に塗り、莊嚴するを以ての故に、諸種類の宝珠の瓔珞を懸け、」

'dogs par byed pa na<sup>12)</sup> rgyal po kri kī'i bu 'bring po dad pa skyes nas gdugs 'bring zhid btags so<sup>13)</sup>

比丘達よ、昔まさにこの賢劫において人間の寿命が二万歳となった時、…世尊、迦葉という師が世界に現れた。彼はバーラーナシーの都城近くの、リシパタナという鹿野苑に住していた<sup>19)</sup>。その時、バーラーナシーではクリキンという王が統治に乗り出していて・・・(中略)・・・<sup>20)</sup>その王に三人の子供がおり、長男と次男と三男であった。正等覚者迦葉があらゆる仏陀の行いをなして薪の尽きた火の如く、無余依涅槃界で完全に入滅した時、その時クリキン王は彼の遺骨を供養して、四宝から造られた、周囲一由旬、高さ半由旬の仏塔を建立した<sup>21)</sup>。それに天蓋を取り付ける時、クリキン王の次男は浄信を生じて、中蓋を取り付けた。

[仏本行集経 T917b12-28]

於後復生波羅捺国。彼時王名吉利尸。以為彼子。於爾之時乃有一仏。出現於世。名曰迦葉多他伽多阿羅訶三藐三仏陀。然彼世尊隨其住世。滅度已後。吉利尸王純以七宝。為造塔廟。所謂金銀頗梨琉璃。及赤真珠珊瑚馬瑙。其宝塔外。更以粗氈。重覆其上。其塔高峻。至一由旬。東西縱広。各半由旬。為作銘記。名曰達舍婆陵迦爾時吉利尸王。所生七子僉白王言。善哉大王。當知我等欲於迦葉多他伽多阿羅訶三藐三仏陀舍利塔上。各各奉施一大傘蓋以覆其塔。善哉大王。願垂聽許。王告之言。任隨汝等。我今聽造爾時彼等諸七王子各以一宝。造其一蓋。覆其塔上。或造金蓋。或造銀蓋。乃至或造碼瑙等蓋。其七子内。第二王子。造其金蓋。以覆塔上。心發是願<sup>(4)</sup>。

<sup>12)</sup>na ] P; ni D.

<sup>13)</sup>[根本説一切有部律雜事 T261c19-28] 過去世時此賢劫中人寿二万歳。有迦葉波仏出現世間。十号具足在婆羅痾斯仙人墮処施鹿林中依止而住。時彼城中王名訖栗枳。以法化世為大法王。広如上説。王有三子謂大中小彼迦葉波仏施化事畢。猶如火尽入大涅槃。其王信敬取仏余身。以諸香木栴檀沈水海岸牛頭天木香等。焚燒既訖滅以香乳。取其舍利置金宝瓶。造大窣堵波皆用四宝。縦広正等一踰繕那高半踰繕那。安相輪時王之中子親上中蓋。(西本 [1935: 197-198] 「過去世の時此賢劫の中人寿二万歳に、迦葉波仏あり世間に出現して十号具足したまへるが、婆羅痾斯仙人墮処施鹿林中に在りて依止して住したまひき。時に彼城中に王あり訖栗枳と名づけ、法を以て世を化して大法王と為り、・・・・・・広く上に説けるが如し・・・・・・王に三子有り、謂はく大と中と小なりき。彼の迦葉波仏は化を施すの事畢りて、猶し火の尽きたるが如くに大涅槃に入りしに、其王は信敬して仏の余身を取り、諸の香木・・・・・・栴檀・沈水・海岸・牛頭・天木香等なり・・・・・・を以て焚燒し、既にして(焚燒し)訖りて滅するに香乳を以てし、其舍利を取りて金宝瓶に置れ、大窣堵波を造りて皆四宝を用ひ、縦広正等して一踰繕那・高さ半踰繕那なりしが、相輪を安かんとせる時、王の中子は親ら中蓋を上れり。)」

<sup>(4)</sup>常盤・美濃 [1934: 458] 「後に復波羅捺国に生る。彼の時王有り、吉利尸 (Kṛki) と名け、以て彼の子と為る。爾の時に乃ち一仏有り、世に出現したまふ。名けて迦葉多 (Kāśyapa) 他伽多・阿羅訶・三藐三仏陀といふ。然るに彼の世尊、其の住世に隨ひ、滅度し已りて後、吉利尸王は、純ら七宝を以て為めに塔廟を作る。所謂、金・銀・頗梨・琉璃・及び赤真珠・珊瑚・馬瑙なり。其の宝塔の外に、更に氈を以て重ねて其の上を覆ふ。其の塔、高峻にして一由旬に至り、東西の縦広各半由旬、為めに銘記を作り、名けて達舍婆陵伽 (Daśaliṅga?) といふ。爾の時吉利尸王所生の七子、

<sup>19)</sup>「比丘達よ～住していた」に想定される Skt. は bhūtapūrvam bhikṣavo asmimn eva bhadrakalpe viṃśatīvarśasahasrāyūṣi prajāyām kāśyapo nāma ... śāstā loka udapādi ... buddho bhagavān | sa vārāṇasīm nagarīm upanīṣṛitya viharati ṛṣipātane mṛgadāve である。以上の定型句の用例については、平岡 [2002: 166] を参照。

<sup>20)</sup>「その時～乗り出していて」に想定される Skt. は tasmin kāle tasmin samaye vārāṇasyām nagaryām kṛkī nāma rājā rājyaṃ kartum ārabdhah であり、クリキン王の定型句として Avś 2.124.13-14 においても、tena khalu samayena vārāṇasyām nagaryām kṛkī rājā rājyaṃ kārayati という形で、ほぼ同じものを見ることができる。

<sup>21)</sup>「正等覚者～建立した」に想定される Skt. は atha kāśyapaḥ samyaksambuddhaḥ sakalam buddhakāryam kṛtvendhanakṣayād ivāgnir nirupadhiśeṣe nirvāṇadhātau parinirvṛtaḥ | tasya rājñā kṛkiṇā śārīre śārīrapūjām kṛtvā samantayojanaś catūratnamaya stūpaḥ pratiṣṭhāpitaḥ krośam uccatvena | であり、Avś 2.76.13-15 にも同様の定型表現が見られる。

## 4. Av-klp と『仏本行集経』に共通する記述

以上のように、Av-klp、MSV、『仏本行集経』の所伝には同内容の要素が複数存在し、大筋においては、三伝本は同系統に属していると見ることができる。しかし、これを根拠に、Av-klp の所伝が MSV の所伝に基づいて著された、と直ちに結論付けることはできない。何故なら、Av-klp の所伝には、MSV の所伝には見られない、或いは MSV の所伝と相違する記述が含まれているからである。例えば、Av-klp に見られる要素 (i) 「神変を用いて水瓶を空にし、難陀を阻む仏陀」(v. 86) (ii) 「習気の喩えを述べる仏陀」(vv. 93–94) (iii) 「毘婆尸仏の仏塔を建立し、比丘の僧団を沐浴させるバラモンの子の物語」(vv. 143–144) は、MSV の所伝には見られない。ところが、興味深いことに、要素 (i)–(iii) は、ほぼ同じものを、同じく MSV 系統の伝本である『仏本行集経』の所伝の中に見ることができる。

### 4. 1. 水瓶を空にして難陀を阻む仏陀

Av-klp 第 86 詩節では、妻の元へ戻ろうとする難陀を、仏陀が神変を用い、水瓶を空にして阻んだことが次のように述べられる。

#### [Av-klp XI 86]

tasyāhartuṃ gatasyātha salilaṃ pāribhogikam |  
muhuhpūrṇasamutkṣiptaḥ sūnya evābhavad ghaṭaḥ ||

それから彼は、〔世尊が〕用いる水を取りに行ったが、水瓶は幾度も〔水を〕満たして立てて置かれていたにもかかわらず、全く空になっていた。

これに相当する MSV の記述は、次の通りである。

#### [MSV D120b4–5; P115b4–5]

gnas khang rnam kyī sgo gcad<sup>14)</sup> la 'gro'o snyam nas des gnas khang rnam kyī sgo gcod  
par brtsams pa dang | bcom ldan 'das kyis<sup>15)</sup> de gang gi tshe gnas khang gcig gi sgo gcad<sup>16)</sup>  
pa de'i tshe gzhan phye<sup>17)</sup> bar gyur pa de lta bur byin gyis brlabs pas de skyo nas smras pa  
|<sup>18)</sup>

<sup>14)</sup> gcad ] conj.; bcad DP.

<sup>15)</sup> kyis ] D; kyī P.

<sup>16)</sup> gcad ] P; bcad D.

<sup>17)</sup> phye ] conj.; bye PD.

<sup>18)</sup> [根本説一切有部律雜事 T251c9–11]

復作是念。閉戸而去。世尊即令閉一戸竟。更閉余戸彼戸便開。(西本 [1935:165] 「復是念を作さく、「戸を閉ちて而去らん」。世尊即ち一戸を閉ち竟りて更に余戸を閉ちんとして彼戸をして便ち開かしめたまひければ、)

僉王に白して言はく、「善い哉、大王当に知るべし、我等は迦葉多他伽多・阿羅訶・三藐三仏陀の舍利塔上に、各各一大傘蓋を奉施し、以て其の塔を覆はんと欲す。善い哉、大王、願はくは聴許を垂れたまへ」。王之に告げて言はく、「汝等に任随して、我今造ることを聴す」。爾の時彼等諸の七王子、各一宝を以て、其の一蓋を造りて其の塔上を覆ひ、或は金蓋を造り、或は銀蓋を造り、乃至、或は碼瑙等の蓋を造る。其の七子の内、第二の王子は其の金蓋を造りて以て塔上を覆ひ、心に是の願を發す、

〔難陀が〕僧院の扉を閉めに行こうと考えて、彼が僧院の扉を閉めようとする、世尊は、彼が一つの僧院の扉を閉めた時、他〔の扉〕が開くというそのような神変を起こしたので、彼は悩まされて言った。

つまり、僧院の扉を閉めて立ち去ろうとした難陀を、仏陀が神変を用いて扉を開くことによって阻んだと述べており、仏陀の起こした神変の内容について、Av-klpの所伝と相違が見られる。ところが、『仏本行集経』の所伝には、神変の順序に相違があるものの、Av-klpの所伝と同じ内容のものを以下のような形で見る事ができる<sup>22</sup>。

### [仏本行集経 T913c29-914a3]

<sup>22</sup>この扉の神変で難陀を阻む仏陀に関する記述は、『仏本行集経』中にも以下のような形で見る事ができるが、MSVの所伝が「塵の神変」→「扉の神変」の順序で仏陀の神変を記述し、水瓶の神変の記述を欠くのに対し、『仏本行集経』の所伝は、水瓶の神変の記述を含み、「扉の神変」→「水瓶の神変」→「塵の神変」の順で記述する点に相違が見られる。Av-klpの所伝は、扉の神変に関する記述を欠く。

#### [仏本行集経 913b2-25]

長老難陀。作如是念。世尊已入聚落乞食。我今当得還其家内

爾時難陀。遂見世尊房門不閉作如是念我閉此門。然後還去

即閉彼門。見舍利弗房門復開。即復往閉舍利弗門

既閉彼門。其目鍵連房門復開。尋即閉彼目連房門

既閉彼門。見大迦葉房門復開。尋即往閉大迦葉門

既閉彼門。復見摩訶迦旃延房。其門復開。尋復往閉迦旃延門

既閉彼門。又見優樓頻螺迦葉房門復開。尋即往閉優樓頻螺迦葉房門。既閉彼已。那提迦葉房門復開。尋復往閉那提房門

既閉彼已。伽耶迦葉房門復開。爾時難陀。尋復閉彼伽耶房門

既閉彼已。優波斯那房門復開。閉彼門已。見俱絺羅房門復開 既閉彼已。復見摩訶專陀門開。閉彼門已。見利婆多房門復開。閉彼門已。見優波離波多房門復開 如是次第。閉一門已。第二門開。閉第三已。第四門開。彼見其門一開一閉。(常盤・美濃 [1935: 445-446] 「長老難陀、是の如き念を作す、『世尊は已に聚落に入りて、食を乞ひたまふ。我、今当に其の家内に還るを得べし』。爾の時難陀、遂に世尊の房門の閉ぢざるを見、是の如き念を作す、『我、此の門を閉ぢて、然る後還り去らん』と。即ち彼の門を閉ぢるに、舍利弗の房門の復開くを見、即ち復往きて舍利弗の門を閉ぢ。既に彼の門を閉ぢるに、其の目鍵連の房門、復開きたれば、尋いで即ち彼の目連の房門を閉ぢ。既に彼の門を閉ぢるや、大迦葉の房門、復開けるを見て、尋いで即ち往きて大迦葉の門を閉ぢ、既に彼の門を閉ぢて、復摩訶迦旃延の房を見るに、其の門復開きたれば、尋いで復往きて迦旃延の門を閉ぢ、既に彼の門を閉ぢて、又優樓頻螺迦葉の房門、復開けるを見、尋いで即ち往きて優樓頻螺迦葉の房門を閉ぢ、既に彼を閉ぢ已るや、那提迦葉の房門、復開きたれば、尋いで復往きて那提の房門を閉ぢ、既に彼を閉ぢ已るに、伽耶迦葉の房門復開く。爾の時難陀、尋いで復彼の伽耶の房門を閉ぢ、既に彼を閉ぢ已るに、優波斯那の房門復開きたれば、彼の門を閉ぢ已り、俱絺羅の房門復開けるを見、既に彼を閉ぢ已り、復摩訶專陀の門の開けるを見、彼の門を閉ぢ已るや、利婆多の房門復開けるを見、彼の門を閉ぢ已りて、優波離波多の房門の復開けるを見たり。是の如く次第に、一門を閉ぢ已れば、第二門開き、第三を閉ぢ已れば、第四門開く。彼、其の門の一開一閉を見て、)」

また、神変で難陀を阻む仏陀に関する記述は、2.3に示したように『雜宝藏経』の所伝にも見られるが、同所伝の記述では、世尊は神変を用いて水瓶を空にし、更に僧院の扉を開いて難陀を阻んだと記述され、3.2に示した、MSV系伝本に見られる「塵の神変を起こして難陀を阻む仏陀」に関する記述を欠く。

#### [雜宝藏経 T485c26-486a3]

仏入城後。作是念言。当為汲水令滿澡瓶。然後還歸。尋時汲水。一瓶適滿。一瓶復翻。如是經時。不能滿瓶。便作是言。俱不可滿。使諸比丘來還自汲。我今但著瓶屋中。而棄之去。即閉房門。適閉一扇。一扇復開。適閉一戸。一戸復開。更作是念。俱不可閉。(美濃・常盤ほか [1931: 265] 「仏の城に入りたまひし後念を作して言く、当に為に水を汲み澡瓶を満さしめ然る後還歸すべしと、尋ひて時に水を汲みしに、一瓶適滿つれば一瓶復翻る、是の如く時を経給へしも瓶に滴すること能はざりしかば、便ち是言を作さく、俱に満すべからざらん。諸の比丘來り還らば自ら汲むべし。我今但瓶屋中に著きて之を棄て去らんと。即ち房門を閉ぢんとし、適一扇を閉ぢれば一扇復開き、適一戸を閉ぢれば一戸復開く、更に是念を俱に閉ぢべからず、)」

彼時難陀。復作是念。掃地且止。我先当令所有衆僧水澡盥器。先著水滴。然後向家。作是念已。取彼澡盥。将至水所。悉滴盛水。其所滴器。滴已還覆<sup>(5)</sup>。

#### 4. 2. 習気の喩え

Av-klp の第 93-94 詩節には、妻への執着を断ち切れない難陀に仏陀が習気の喩えを述べる、次のような記述が存在している。

[Av-klp XI 93-94]

adhivāsayati sparśaleśenāpi kusamgamah |  
praklinnamatsyakūṇapāt pūtigandha ivodgataḥ ||  
kalyāṇamitrasaṃparkaḥ sarvathā kuśalāvahaḥ |  
śubhāmōda iva vyāpto yaḥ karoti mahārhatām ||

悪しき交わりは、恰も腐敗した魚の死骸から立ち昇る悪臭〔が、僅かに触れるだけで臭いを残す〕ように、僅かに接触するだけで〔悪〕影響を及ぼす。善き友との交わりは、恰も充ちた快い清香〔が、あらゆる点で幸福をもたらす〕ように、あらゆる点で幸福をもたらす。〔何故なら〕その〔善き友との交わり〕は最高の価値ある境地をもたらすのだから。

この記述は MSV の所伝には存在しないが、『仏本行集経』の所伝には、Av-klp と同内容の偈文を以下のような形で見出すことができる。

[仏本行集経 914c8-9, 25-26]

猶如在於魚鋪上 以手執取一把茅 其人手即同魚臭 親近惡友亦如是  
若有手執沈水香 及以薰香麝香等 須臾執持香自染 親附善友亦復然<sup>(6)</sup>

#### 4. 3. 毘婆尸仏の仏塔を建立し、比丘を沐浴させるバラモンの息子

Av-klp 第 143-144 詩節には、難陀が前世においてバラモンの息子であった時、毘婆尸仏の仏塔を建立し、比丘の僧団を沐浴させたことを述べる、次のような二つの過去世物語が見られる。

[Av-klp XI 143-145ab]

stūpe vipaśyinaḥ samyaksambuddhasyārhatāḥ purā |  
nagaryām aruṇāvatyām aruṇena mahībhujā ||

<sup>(5)</sup>常盤・美濃 [1934: 447] 「彼の時難陀、復是の念を作す、『地を掃くを且く止め、我先づ当に有らゆる衆僧の水澡盥器をして、先ず水に著けて満たしめ、然る後に家に向ふべし』。是の念を作し已りて、彼の澡盥を取り、將つて水の所に至り、悉く水を満し盛るに、其の満せる所の器、満ち已りて還覆へる。」

<sup>(6)</sup>常盤・美濃 [1934: 450] 「『猶ほ魚鋪上に在りて 手を以て一把の茅を執取るに 其の人の手は即ち魚臭に同ずるが如く 悪友に親近するも亦是の如し』 『若し手に沈水香 及び薰香麝香等を執る有りて 須臾執持せば香自ら染む 善友に親附するも亦復然り』」

kriyamāṇe<sup>4</sup> maṇimaye maitro nāma dvijātmajaḥ<sup>5</sup> |  
 mahataḥ puṇyabhāgasya<sup>6</sup> bhāgī kārakatāṃ yayau ||  
 sa eva bhikṣusamghasya jentākasnānasattrakṛt<sup>7</sup> |

昔、アルナーヴァティー (Aruṇāvati) という都城のアルナ (Aruṇa) という王によって、正等覚者であり、阿羅漢である毘婆尸仏の仏塔が、宝珠を材として建立されていた時、マイトラ (Maitra) という名の再生族の息子が、偉大な福德の分け前に与ろうとして<sup>23</sup>、建立者となった。同じ彼は、比丘の僧団のために、蒸風呂と沐浴のための家を造った。

これに対応する『仏本行集経』の過去世物語は次の通りである。

[仏本行集経 917a2–24]

汝諸比丘。我念往昔九十一劫。時有一仏出現於世。名毘婆尸多他竭多阿羅呵三藐三仏陀如来応供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師仏世尊。於彼世界王所居住。彼有一城。名盤徒摩低。於時彼仏依彼城住。有諸比丘六千人。俱皆阿羅漢。時有一王。名曰盤頭。供養彼仏及比丘僧。尊重恭敬。所謂衣服臥具飲食。及諸湯藥房舎之具。無所乏少

爾時盤頭摩低城内有一種姓婆羅門子。而彼童子营造温室。請仏及僧洗浴供養。其婆羅門種姓童子。見諸比丘從温室出。身体清淨。甚大香潔無有臭氣。見已心生歡喜。踊躍遍滿其体。不能自勝。心発是願。願我来世。常得如是清淨無垢不腥臭身。当似如是比丘僧等清淨香潔無臭之身。又於後時毘婆尸仏多他伽多阿羅呵三藐三仏陀。入般涅槃。其王盤頭。為彼世尊所有舍利。取四種宝。為造塔廟。所謂金銀琉璃頗梨。時彼種姓婆羅門子。檢校經營。当造彼塔。既造塔已。心作是願。願我来世恒常值遇如是世尊。彼所説法。願我領解悉得証知。莫背彼法。生生世世。不入惡道<sup>(7)</sup>。

<sup>4</sup>kriyamāṇe ] Ex conj. de Jong; kriyamāṇo Ed; kriyamāṇa DZ.

<sup>5</sup>dvijātmajaḥ ] DZ(de Jong); dvijanmajaḥ Ed.

<sup>6</sup>mahataḥ puṇyabhāgasya ] Ex conj. Tib. (chen po'i bgo skal gyi); mahataḥ puṇyabhogasya EdDZ.

<sup>7</sup>jentākasnānasattrakṛt ] Ex conj. Yokochi; jantukāsthānasattrakṛt Ed; jentākasthānapatrakṛt DZ; jentākasnānasattrakṛt Ex conj. de Jong.

<sup>(7)</sup>美濃・常盤 [1934: 456–457] 「『汝諸の比丘、我念ふに、往昔九十一劫に時に一仏有りて世に出現したまひ、毘婆尸 (Vipaśyī) 多他竭多・阿羅呵・三藐三仏陀・如来・応供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊と名く。彼の世界の王の居住する所に於て、彼に一城有り、盤徒摩低 (Bandhumatī) と名づく。時に彼の仏、彼の城に依りて住したまひ、諸の比丘六千人有り、俱に皆阿羅漢なり。時に一王あり、名けて盤頭 (Bandhu? Bandhuma? Bandhumatā) と曰ふ。彼の仏、及び比丘僧を供養し、尊重恭敬す。所謂、衣服・臥具・飲食・及び諸の湯

<sup>23</sup>該当箇所を Ed 及びデルゲ版音写通りに読むと、「偉大な福德の享受に与ろうとして」となり、意味が説明されない。従つて mahataḥ puṇyabhogasya bhāgīを Tib. bsod nams chen po'i bgo skal gyi skal ldan byed po に従い、mahataḥ puṇyabhāgasya bhāgī「偉大な福德の分け前に与る者」に修正する。puṇyabhāga-「福德の分け前」に類似した表現は、Abhidharmakośavyākhyā 438.32 にも、以下のような形で見る事ができる。

puṇyabhāgīyam iti | puṇyasya bhāgaḥ prāptir iti puṇyabhāgaḥ | iṣṭaphalaprāptir ity arthaḥ |

舟橋 [1987: 528–529] 順福分とは福德の割り当て (bhāga) [即ち] 得することであるから、福分である。可愛なる果を得ること、という意味である。

『仏本行集経』の所伝は、Av-klpの所伝と過去世物語の順序とその主人公と都城、都城の王の名において相違こそあれ<sup>24</sup>、「バラモンの息子が比丘を沐浴させ、毘婆尸仏の仏塔建立を行った」とする過去世物語の内容はAv-klpのそれとほぼ同じである。ところが、MSVの所伝の相当箇所は次の如くに述べられる。

[MSV D153b1–155b1; P146a6–148a2]

dge slong dag sngon byung ba skye dgu mams kyi tshe lo brgyad khri thub pa na ston pa ... mnam par gzigs zhes bya ba mi'i 'jig rten du byung stel de 'khor dge slong 'bum phrag drug bcu rtsa gnyis dang ljongs rgyu zhing gshegs pa na rgyal po'i pho brang gnyen ldan du byon nas gnyen ldan kyi tshal na bzhugs so | [P146b1] ... **de'i tshe rgyal po'i pho brang gnyen ldan na rgyal po gnyen ldan zhes bya ba rgyal srid byed du 'jug ste | ... [D154a1] de'i g.yas khyim gyi nu bo ni 'dod pa rnam la shin tu chags par gyur to | ... [D154a1] de'i g.yas khyim gyi nu bo ni 'dod pa la lhag par chags pa dang ldan pas khyim nas ma byung ba dang | de la blon po'i bu dang | mdun na 'don gyi bu dang | gzhan yang chung po grogs rnam kyi dong ste smras pa | grogs po rgyal po ni btsun mo'i 'khor dang | gzhan nu dang | blon po dang | grong mi dang bcas te yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnam mnam par gzigs blta ba'i phyir gshegs na | khyod lta bu mi nyid rnyed dka' zhing shin tu rnyed dka' ba thob nas 'dod pa rnam la shin tu chags nas khyim nas ma byung ngo | de de dag gis btams pa dang | snying la ngo tsha bar gyur nas de dag 'grogs te yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnam par gzigs ga la ba der song ngo | ... [P147a3] **de la yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas [D154b1] rnam par gzigs kyis de lta bu'i chos bshad do | des de thos nas de bzhin gshegs pa rnam par gzigs la dad pa rnyed pa dang ldan te | stan las lang nas bla<sup>19)</sup> gos phrag pa gcig tu bzar<sup>20)</sup> te | yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnam par gzigs ga la ba der<sup>21)</sup> logs su thal mo sbyar ba bdud nas yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnam par gzigs la 'di skad ces gsol to | bcom ldan 'das nyan thos kyi dge 'dun dang bcas te bdag gi sdum bar khru khang gis<sup>22)</sup> khru par mdzad par ci gnang | bcom ldan 'das yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnam par gzigs kyis cang mi****

<sup>19)</sup>bla ] P; blo D.

<sup>20)</sup>bzar ] P; gzar D.

<sup>21)</sup>der ] P; de D.

<sup>22)</sup>gis ] conj.; gi DP.

業、房舎の具、乏少する所なし。爾の時盤頭摩低城内に一種姓の婆羅門の子有り。彼の童子、温室を营造し、仏及び僧を請じて洗浴供養す。其の婆羅門種姓の童子、諸比丘の温室より出づるや、身体清浄に、甚大香潔にして、臭気あるなきを見、見已りて心に歡喜踊躍を生じ、其体に遍満し、自ら勝ふる能はず、心に是の願を發す。「願はくは我来世に常に是の如き清浄無垢、不腥臭の身を得んこと、当に是の如き比丘僧等の清浄香潔無臭の身に似るべけん」。又後時に毘婆尸仏・多他伽多・阿羅呵・三藐三仏陀の般涅槃に入りたまふや、其の王盤頭、彼の世尊の有らゆる舎利の為に、四種の宝を取りて、為めに塔廟を造る。所謂、金・銀・琉璃・頗梨なり。時に彼の種姓婆羅門の子、当に檢校經營して彼の塔を造るべく、既に塔を造り已りて、心に是の願を作す、「願はくは我来世に恒常に是の如き世尊に値遇したてまつり、彼の所説の法を、願はくは我領解して悉く証知するを得、彼の法に背くこと莫く、生生世世に惡道に入らざらん」と。」

<sup>24)</sup>バンドウマット (Skt. Bandhumat, Tib. gnyen ldan, 親慧、盤頭) 王に関する記述は、Avs 第 24, 62–71, 81, 86, 88 章などに見られ、毘婆尸仏の同時代の王として、バンドウマティーという都城を治めていたという定型句を以て描かれる。Av-klpに見られる王の名アルナ (Aruṇa, 曙色) 及び都の名アルナーヴァティーは他に典拠が見られず、この際、何故名前を改竄する必要があったのかは全く不明であるが、恐らくクシェーメンドラによる改竄と思われる。

gsungs bas gngang ngo l ... [D155b1; P148a2] de nas rgyal po'i nu bo de dad pa skyes nas  
khrus khang gi nang du gshegs su gsol to<sup>23)</sup>

比丘達よ、昔人間の寿命が八万歳となった時、・・・(中略)・・・毘婆尸という師が人間世界に現れた。彼は六万二千の比丘の取り巻きと地方遊行をしていた時、バンドウマティー (gnyen ldan) という王宮に着き、バンドウマティーの園林に滞在していた。・・・(中略)・・・その時、バンドウマティーの王宮ではバンドウマツトという王が統治していて<sup>25)</sup>、・・・(中略)・・・彼の異母弟は諸々の愛欲に酷く執着していた。・・・(中略)・・・彼の異母弟は愛欲に酷く執着していたので、家から出ずにいると、そこへ大臣の子息、宮廷祭官の子息、そして更に同年代の友人達がやってきて言った。「友よ、王が妃の取り巻き、王子、大臣、都の人々を伴って、正等覚者、毘婆尸に見える為に行っている時、爾の如き人は、得難く、誠に得難い人を得たにもかかわらず、諸々の愛欲に酷く執着して家から出ない。」彼等に言われて、心に羞恥を覚え、彼等と共に正等覚者毘婆尸のもとへ行った。・・・(中略)・・・そして正等覚者毘婆尸はかく説法した。彼はそれを聞いて如来毘婆尸に浄心を抱いて座から立ち上がり、上衣を一方の肩に掛けて正等覚者毘婆尸のいる所に向かって合掌し、敬礼してから正等覚者毘婆尸に次のように言った<sup>26)</sup>。「世尊よ、声聞の僧団と一緒に私の邸宅の沐浴場で沐浴していただけないか。」と。世尊、正等覚者毘婆尸は無言で許諾した。・・・(中略)・・・そして、その王弟は浄信を生じて沐浴場の中に入るよう請うた。

MSV 所伝の過去世物語は、毘婆尸仏を沐浴させる人物をバラモンの息子ではなく、バンドウマツト王の異母弟とする点で Av-klp、『仏本行集経』の所伝との相違が見られる。更に、バラモンの息子が毘婆尸仏の仏塔を建立したという後半部(『仏本行集経』では前半)の物語は全く見られ

<sup>23)</sup> [根本説一切有部律雜事 T260c15-261b4] 汝等諸苾芻。過去世時九十一劫人壽八萬歲。有毘婆尸仏・・・(中略)・・・世尊出現於世。与六万二千苾芻。遊行人間至親慧城王所都處往親慧林。即於此住。・・・(中略)・・・時彼國主名曰有親。... 王異母弟極耽婬染。... 其弟耽欲不肯出門。時大臣子及余知友無塵之類詣而告曰。善友知不。王及王子并諸內宮大臣人衆。往毘鉢尸仏所躬行禮敬。聽受妙法獲殊勝解。人身難得汝已得之。如何今時耽著婬欲不肯出門。彼聞責已心生愧恥。俛仰相隨同行而去。・・・(中略)・・・仏親彼類稱根欲性而為説法。既得聞已深起信心。從座而起偏袒右肩。合掌向仏白言世尊。唯願大師及諸聖衆。明至我家入温室澡浴。仏默然受・・・(中略)・・・時彼王弟引仏世尊。入温室內授香水等以充澡浴。(西本 [1935: 194-196] 「汝等諸苾芻、過去世の時九十一劫人壽八萬歳にして毘婆尸仏・・・(中略)・・・世尊ありて世に出現したまひ、六万二千の苾芻と与に人間に遊行して親慧城王の都せる所の処に至り、親慧林に往いて即ち此に於て住したまへり・・・(中略)・・・時に彼國主は名を有親と曰ひ。・・・(中略)・・・王の異母弟は極めて婬染に耽りき。・・・(中略)・・・其弟は欲に耽りて門を出づるを肯んぜざりに。時に大臣の子及び余の知友無塵の類は詣りて告げて曰く、「善友、知れりや不や、王及び王子並びに諸の内宮・大臣・人衆は毘鉢尸仏所に往いて躬ら禮敬を行じ、妙法を聽受して殊勝の解を獲たり。人身得難きに汝已に之を得たり、如何ぞ今時婬欲に耽著して門を出づるを肯んぜざる」。彼れ責むるを聞き已りて心に愧恥を生じ、俛仰して相隨ひ同行して去りぬ。・・・(中略)・・・仏は彼類を觀じて根と欲と性とに稱ひて而して法を説きたまひしに、既にして聞くを得已るに深く信心を起し、座よりして起ち偏袒右肩し合掌して仏に向ひ白して言さく、「世尊、唯願はくは大師及び諸の聖衆には、明、我家に至り温室に入りて澡浴したまはんことを」。仏默然して受けたまひしに、・・・(中略)・・・時に彼王弟は仏世尊を引いて温室內に入り、香水等を授けて以て澡浴に充てしに、)」

<sup>25)</sup> 「彼は～統治して」に想定される Skt. は、dvāṣaṣṭibhikṣusahasraparivāro janapadacārikāṃ caran bandhumatīm rājadhānīm anuprāpto bandhumatyāṃ viharati sma bandhumatīyake dāve | tena khalu samayena bandhumatyāṃ rājadhānyāṃ bandhumān nāma rājā rājyaṃ kārayati... であり、Divy 282.22-26 においても同様の表現が見られる。

<sup>26)</sup> 「浄心を抱いて～言った」に想定される Skt. は atha sa labdhaprasāda utthāyāsanād ekāṃsam uttarāsaṅgaṃ kṛtvā yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇāmya bhagavantam idam avocat であり、Avś 1.69.12-14 にも、atha sa rājā labdhaprasāda utthāyāsanād ekāṃsam uttarāsaṅgaṃ kṛtvā yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇāmya bhagavantam idam avocat という定型表現としてほぼ同じ形で見られる。

ない。敢えて毘婆尸仏の仏塔建立に相当する物語を MSV 中に求めるならば、3.4 に示したクリキン王の息子の物語の後に見られる、次のような比丘の誓願物語が相当することとなろう。

[MSV D157b7–158a5; P150a4–150b2]

dge slong dag 'di yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas [D158a1] 'od srung gi bstan pa la rab tu byung bar gyur te | gang las 'di rab tu byung ba de bcom ldan 'das yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'od srung gis dbang po'i sgo bsdams pa mams kyi mchog tu bstan to | de na 'dis tshe ji srid par tshangs par spyod pa spyod<sup>24)</sup> kyang yon tan gyi tshogs 'ga' yang ma thob po | de na 'dis 'chi ba'i dus kyi tshe smon lam btab pa | 'di ltar bdag gis yon gnas bla na med pa bcom ldan 'das yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'od srung gi sbyan sngar tshe ji srid par tshangs par spyod pa spyad kyang yon tan gi tshogs 'ga' yang thob par ma gyur gyis | bdag dge ba'i rtsa ba 'dis bcom ldan 'das yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'od srung gis bram ze'i khye'u bla ma la bram ze'i khye'u khyod skye dgu'i tshe lo brgya thub pa na | de bzhin gshegs pa dgra bcom yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas shā kya thub par 'gyur ro zhes lung bstan pa gang yin pa de'i gsung rab la rab tu byung nas nyon mongs pa thams cad spangs te dgra bcom pa [P150b1] nyid mngon du byed par 'gyur ba dang | ji ltar bcom ldan 'das yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'od srung gis bdag gi<sup>25)</sup> mkhan po dbang po'i sgo bsdams pa mams kyi mchog tu bstan pa de bzhin du bdag kyang bcom ldan 'das shā kya thub pa shā kya'i rgyal po gtso bo des dbang po'i sgo bsdams pa mams kyi mchog tu lung ston par 'gyur cig ces byas te |<sup>26)</sup>

比丘達よ、彼は正等覚者迦葉の教えに従って出家して、彼が出家するもととなった、かの世尊、正等覚者迦葉によって「根門が抑制された者達の中で最上の者である。」と示された。その時、彼は命の限り梵行を行じたが、徳の集まりを少しも得なかった。そこで、彼は臨終に際して、誓願を立てた。「かく私は無上応供者、世尊、正等覚者、迦葉の前で命の限り梵行を行じたが、徳の集まりを少しも得なかったので、私はこの善根によって、世尊、正等覚者迦葉が最高のバラモンの男子〔ウッタラ〕に『バラモンの男子よ、爾は人間の寿命が百年となる時、如来、阿羅漢、正等覚者、釈迦牟尼となろう。』と予言した所の、その〔バラモンの男子〕の妙法に従って出家し、一切の煩惱を断じ、阿羅漢たることを直証したい。世尊、正等覚者迦葉によって私の和尚が「根門が抑制された者達の中で最上の者である。」と明言されたように、そのように私もこの世尊、釈迦牟尼、釈迦族の最高の王によって『根門が抑制された者達の中で最

<sup>24)</sup> spyod ] D; spyad P.

<sup>25)</sup> gi ] D; gis P.

<sup>26)</sup> [根本説一切有部律雜事 T262a6–15] 難陀苾芻於迦提波仏時捨俗出家。其親教師彼仏法中。善護根門稱為第一。盡其形壽梵行自持。然於現身竟無証悟於命終時便發誓願。我於仏所盡斯形壽梵行自持。然於現身竟無所証。願我以此修行善根。此仏世尊記未來世。有摩訶婆當成正覺号釈迦牟尼。我於彼仏教法之中。出家離俗断諸煩惱。獲阿羅漢如親教師。於斯仏所善護根門最為第一。我亦如是於彼教中。守護根門最為第一。(西本 [1935: 198] 「難陀苾芻は迦提波仏の時に俗を捨てて出家せるに、其が親教師は彼仏法の中にて根門を善護して稱して第一たりしが、其形壽を尽くして梵行もて自ら持せるも然も現身に於て竟に証悟するなかりければ、命終時に於て便ち誓願を發せるらく、「我れ仏所に於て斯の形壽を尽くして梵行もて自ら持せるも、然も現身に於て竟に所証なかりき。願はくは我れ此修行の善根を以て、此仏世尊が「未來世に摩訶婆あり、當に正覺を成じて釈迦牟尼と号すべし」と記したまひぬれば、我れ彼仏の教法の中に於て出家離俗して諸の煩惱を断じて阿羅漢を獲、親教師が斯仏の所に於て根門を善護せること最も第一たりしが如くに、我も亦是の如く彼教の中に於て根門を守護せんこと最も第一たらん」と。)

上の者である。』と明言されるように。」と<sup>27</sup>。

ここで注目すべきは、Av-klp と『仏本行集経』の所伝が、難陀が現世で得た楽果を、「比丘を沐浴させ、毘婆尸仏の仏塔を建立するバラモンの息子」、「独覚の仏塔を建立する長者」、「迦葉仏の仏塔に天蓋を置くクリキン王の息子」という三人の人物を主人公とする過去世物語で説明しようとするのに対し、MSV の所伝は、「毘婆尸仏を沐浴させるバンドウマツト王の異母弟」、「独覚の仏塔を建立する長者」、「迦葉仏の仏塔に天蓋を置くクリキン王の息子」、「迦葉仏のもとで誓願を立てる誓願比丘」という四人の人物を主人公とする過去世物語で説明しようとしている点である。

## 5. 結論

以上の Av-klp 所伝のスンドリー・ナンダ物語と諸伝本の比較検討から、以下の結論が導かれるであろう。

- (1) 初期仏教教団内に難陀比丘の離欲に関する伝承があり、これに天界や過去世物語のエピソードが付加される形でスンドリー・ナンダ物語が成立した。
- (2) スンドリー・ナンダ物語の伝本は2世紀までに西北インドに伝承された。この伝承を受け継ぐ伝本は Av-klp、MSV、『仏本行集経』、『雑宝蔵経』、『増一阿含経』の五本である。
- (3) これらの伝本は、その伝承過程で地獄に関する記述を付加された。
- (4) うち、Av-klp と『仏本行集経』の所伝は明らかに MSV の所伝と同系統に属する。
- (5) Av-klp の所伝は一方では MSV と共通する要素を多く保持しているが、他方では MSV の所伝にない、或いは相違する記述を含んでおり、Av-klp の所伝は MSV のそれに基づいて著されたものでないことが知られる。
- (6) MSV の所伝に欠落、或いは MSV の所伝と相違する Av-klp の記述は、それを同じく MSV 系統に分類される『仏本行集経』の所伝の中に求めることができる。クシェーメンドラが、自らのスンドリー・ナンダ物語の種本とした伝本は、『仏本行集経』の所伝の祖形伝本に最も近い。

Av-klp については、これまで MSV との関係にのみ専ら関心が向けられ、漢訳の仏伝作品との関係については全く問題視されることがなかった。ところが、Av-klp 所伝スンドリー・ナンダ物語

<sup>27</sup> 臨終時の誓願についての記述は、MSV 中にしばしば見られ、Divy 192.26-193.10 においても、次のような形で、ほぼ同じものを見ることができる。

sa bhagavatā kāśyapena samyaksambuddhenābhikṣṇaṃ tejodhātuṃ samāpadyamānānām agro nirdiṣṭaḥ | tatrānena yāvadāyur brahmacaryaṃ caritaṃ na ca kaścid guṇagaṇo 'dhigataḥ | sa maraṇasamaye praṇidhānaṃ kartum ārabdhāḥ | yan mayā bhagavati kāśyape samyaksambudde 'nuttare dakṣiṇīye yāvadāyur brahmacaryaṃ caritaṃ na ca kaścid guṇagaṇo 'dhigato 'nenāhaṃ kuśalamūlena yo 'sau bhagavatā kāśyapena samyaksambuddhenottaro māṇavo vyākṛto bhaviṣyasi tvaṃ mānava varṣaśatāyūṣi prajāyāṃ śākyamunir nāma tathāgato 'rhan samyaksambuddha iti tasyāhaṃ śāsane pravrajya sarvakleśaprahāṇād arhattvaṃ sāksātkuryāṃ | yathā ma upādhyāyo bhagavatā kāśyapena samyaksambuddhenābhikṣṇaṃ tejodhātuṃ samāpadyamānānām agro nirdiṣṭa evaṃ mām api sa bhagavān śākyamuniḥ śākyādhirājo 'bhikṣṇaṃ tejodhātuṃ samāpadyamānānām agraṃ nirdiśed iti |

この種の誓願の特徴として、平岡 [2002: 281-283,467] は、この誓願が必ず迦葉仏の時代の出来事として語られること、「仏陀が『爾は～する比丘達の中で最上の者である』と示されんことを」という内容を含むことの二点を指摘する。

についての本考察から、Av-klp の所伝は、MSV のそれに一方では類似を示しつつも、他方では相異なる要素を含んでいることが知られた。そして、それらの要素が漢訳の伝伝『仏本行集経』中に見られたことは、Av-klp の源泉資料を考える上で、極めて興味深い事実と言えるだろう。

## 略号及び参考文献<sup>28</sup>

### (1) 一次文献

- Abhidharmakośavyākhyā** *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* by Yaśomitra. Ed. U. Wogiwara. 2 vols., Tokyo, 1932-1936.
- Av-klp** *Avadāna kalpalatā: A Collection of legendary Stories about the Bodhisattvas by Kṣemendra, with its Tibetan Version called rtogs brjod dpag bsam 'khri shing by shongton lochāva and Paṇḍita lakṣmīkara. Now first edited from a Xylograph of Lhasa and Sanskrit Manuscript of Nepal.* Ed. Sarat Chandra Das & Paṇḍit Hari Mohan Vidyābhūṣaṇa. 2 vols., Calcutta, 1888-1918.
- Avś** *Avadānaśataka: A Century of edifying Tales belonging to the Hīnayāna.* Ed. J. S. Speyer. 2 vols., St-Petersburg, 1906-1909.
- D** Tibetan Tripiṭaka sDe ge Edition
- de Jong** See de Jong 1996.
- Dhp-a** *The Commentary on the Dhammapada.* Ed. Helmer Smith. 4 vols., London, 1925.
- Divy** *The Divyāvadāna: A Collection of early Buddhist Legends.* Ed. E. B. Cowell & R. A. Neil. Cambridge, 1886.
- Ja** *The Jātaka: Together with its Commentary being Tales of the anterior Births of Gotama Buddha.* Ed. V. Fausbøll. 6 vols., London, 1879.
- P** Tibetan Tripiṭaka Peking Edition
- Saund** *The Saundarananda of Aśvaghōṣa.* Ed. E. H. Johnston. Oxford: Oxford University Press, 1928.
- Subhāṣītaratnakoṣa** *The Subhāṣītaratnakoṣa compiled by Vidyākara.* Ed. D. D. Kosambi & V. V. Gokhale. Cambridge: Harvard University Press, 1957.
- T** 大正新脩大藏経
- Z** Blockprint of the *Bodhisattvāvadānakalpalatā.* Ed. The Fifth Dalai Lama (Tohoku#7034)

### (2) 二次文献

- Dattaray 1974** Dattaray, Rajatbaran *A Critical Survey of the Life and Works of Kṣemendra.* Calcutta: Sanskrit Pustak Bhandar.
- Ingalls 1965** Ingalls, Daniel H. H. *An Anthology of Sanskrit Court Poetry: Vidyākara's "Subhāṣītaratnakoṣa".* Cambridge: Harvard University Press.
- de Jong 1977** de Jong, J. W. *The Bodhisattvāvadānakalpalatā and the Śaḍḍantāvadāna In Buddhist Thought and Asian Civilization: Essays in Honor of Hervert V. Guenther on his sixtieth Birthday.* Emeryville: Dharma Publishing.
- de Jong 1996** de Jong, J. W. "Notes on the Text of the Bodhisattvāvadānakalpalatā," 『法華文化研究』 22, 1-93.
- Johnston 1936** Johnston, E. H. *The Buddhacarita: or, Acts of the Buddha.* Lahore. Reprint: Delhi 2004.
- Kirde 2004** "On the Courtesan in Buddhist Literature with Selected Examples from Kṣemendra's *Bodhisattvāvādānakalpalatā*" In *Aspects of the female in Indian culture: Proceedings of the Symposium in Marburg, Germany, July 7-8, 2000.* Marburg: Indica et Tibetica Verlag (Indica et Tibetica Bd. 44).
- Major 1992** Major, Marek *Kṣemendra's Bodhisattvāvadānakalpalatā: Studies and Materials.* Tokyo: International Institute for Buddhist Studies (Studia Philologica Buddhica Monograph Series VIII).
- Panglung 1981** Panglung, Jampa Losang *Die Erzählstoffe des Mūlasarvāstivāda-Vinaya analysiert auf Grund der tibetischen Übersetzung.* Tokyo: Reiyukai Library (Studia Philologica Buddhica Monograph Series III).

<sup>28</sup>略号表記については、原則として以下に採用されているものを用いた。Heinz Bechert, *Abkürzungsverzeichnis zur buddhistischen Literature in Indien und Südostasien insbesondere zu den Veröffentlichungen der Kommission für buddhistische Studien der Akademie der Wissenschaften in Göttingen* (Göttingen: 1988).

**Śāstri 1910** Śāstri, Haraprasāda *Saundarananda-kāvya*. Calcutta: Asiatic Society of Bengal (Bibliotheca Indica n. s. #1251).

**Sūryakānta 1954** Sūryakānta Kṣemendra *Studies: Together with an English Translation of his Kavikaṇṭhābharṇa, Aucityavi cāracarcā and Suvṛttatilaka*. Poona: Oriental Book Agency.

**Tatelman 2000** Tatelman, Joel *The Glorious Deeds of Pūrṇa: A Translation and Study of the Pūrṇāvadāna*. Surry: Curzon Press.

常盤・美濃ほか 1931 常盤大定・美濃晃順・岡教遂『国訳一切経 本縁部一二』大東出版社

常盤・美濃 1934 常盤大定・美濃晃順『国訳一切経 本縁部三』大東出版社

西本 1935 西本龍山『国訳一切経 律部二十五』大東出版社

干潟 1954 干潟龍祥『本生経類の思想史的研究』(東洋文庫論叢第35) 東洋文庫

平岡 2002 平岡聡『説話の考古学』大蔵出版

平等 1938 平等通昭「馬鳴作孫陀羅難陀詩の資料に就て」(『日本宗教学会第四回大会紀要』pp. 224-234)

舟橋 1987 舟橋一哉「俱舎論の原典解明一業品一」法蔵館

渡辺 1990 渡辺研二「ジャイナ教所伝「ナンダとスングリー物語」」(『印度学仏教学研究』38-2. pp. 897-901)

(やまさき かずほ, 広島大学大学院 [インド哲学])